

人生ドラマチック

作家 宮本 輝 病気との闘い ②



本名＝宮本正仁。兵庫県神戸市生まれ。昭和22年/1947年3月6日～。芥川賞作家。追手門学院大学文学部卒。幼少時から波瀾万丈な家庭環境を経験。卒業後、サンケイ広告社に勤めるも24歳の時、病気、不安障害・パニック障害発症。25歳の時、創価学会に入信。昭和50年/1975年、28歳で恐怖が極限状態になり退社。家に引きこもり独学で小説を書き作家を目指す。作家になった背景・誘引に不安障害・パニック障害があった。同人誌「わが仲間」の池上さんには強く影響を受けた。「説明をするな！ 描写をしなさい！」といわれた。「雨が降ったら、雨が降ってきた……と書く」
病気の時、今井英彦先生に全てを聞いてもらった。先生は「パニック障害という病気は、天才がかかる病気！」といわれ、この言葉に救われた。パニック障害のおかげで、25歳から生死の淵を歩けた。

30歳の時、第13回太宰治賞(昭和52年/1977年)「泥の河」で作家デビュー
第78回芥川賞(昭和52年/1977年下期)「螢川」

医療法人 和楽会 横浜クリニック院長 山田 和夫さんの解説

四コーナーの隅っこの芝生に座って、ビールでも飲んだら治るかなと思って飲んだけど、ますます心臓はドキドキしてくる。で、「調子悪いから帰る」って、友達おいて…。電車途中でまたなるんです。這々の体で家に帰った。その時はまあ、仕事が凄く忙しかったからな、残業も続いていたし、体調が悪くて低血圧になったのか、高血圧になったのか、それとも心臓が悪いのか、いろいろ考えた。何日か過ぎて、また会社行く電車でなってる。これは本当におかしいと思って、そう思いながらも、まだ病院には行かなかったんや。

サラリーマンやから、昼間昼食で外に出るでしょ？そしたら今度はラーメン屋に入ってもなるし、定食屋に入ってお昼ご飯食べてても発作が起こるし…。これは間違いなく変だと思ったのは、まだ結婚前の家内と映画の『ゴッドファーザー』を観に行った時、アル・パチーノが父親の仇打ちで警官を殺す場面があるよね。前もって友達がレストランのトイレの水槽の中に拳銃を隠しとくの。かなりドキドキする場面やろ？その時心臓がタタタタ…と。普通に映画を観てなるドキドキと違うねん。本当に、もう、『もう死ぬわ、これ』っていう…。だから僕だけ客席を出て、トイレに暫く座とったんよ。どうしても治まらへんねん。その翌日に病院に行っただけです。心電図を取ったり、いろんな検査をやったけど、何も無いから医者は『まあ、あなたはこう…非常に自律神経が、子供の時から乱れ易いタイプだったんじゃないかな』と。『今までこんな事になったの初めてなんです。25年間生きてきて、一度もなかった。どうしてですか?』と訊いたら、『それは若さっていうものもあるけれども、やっぱりいろんな仕事のストレスというのが、社会人になってから重なってきたんやないかな』と。

今思えば、幼稚園の時に首が回らなくなってるし、その兆候はあったんやね。その時にもらった薬は精神安定剤みたいなやつ、そやけどあんまり効かんかったな。」

〔宮本輝のパニック障害の方へのアドバイス〕

「生きている限りストレスの排除なんて不可能。そういう時はまず、腕の良い専門医に行きなさい。難しいやけどね。腕が良いという評判の神経クリニックとか精神科にはものすごい数の患者さんが来るから予約一杯でしょ？ほんと3時間待ちの3分診療やね。とはいえ閑古鳥が鳴いているような病院やと、また不安やしな。いずれにしてもパニック障害っていうのは病気として確立されてきたからね。何にも無いのに死にそうな動悸がしたり、不安感に襲われたり、ちょっとでも苦しい思いがしてきたら、ためらわず専門医に行くべきです。」(宮本輝監修「宮本輝の本～記憶の森～」(宝島社:2005、16頁より引用)

このように、宮本輝は典型的な空間恐怖を伴うパニック障害を、サラリーマンになったばかりの24歳に発症するわけです。その後毎日パニック発作に襲われ、死の恐怖の中に陥ります。何とか耐えて仕事をしていましたが、28歳時その恐怖が極限状況になったため会社を退職し、家に引き籠もる事になります。家に引き籠もりながら出来る仕事や、好きな小説を書くことになったわけです。既に中学生頃より、社会不安のために押し入れに籠もり空想の小説世界に浸る習性がありました。それは多くの物語を脳内に醸成し、波乱万丈の極限的生活が人生を深く見つめさせ、小説を作り出す土台になったと思います。そしてパニック障害です。会社をやめ自宅に籠もってできる小説家の道へ引っ張り込みます。小説を書く事は、現実的不安を昇華することになり、自身の癒し効果があります。これはまさに不安の力です。